

平成 23 年 度 自 己 評 価 表（学部）

鳥取県立鳥取養護学校

中長期目標 (学校ビジョン)	安心、支え合い、学び合いのあふれる学校 ～児童生徒一人一人が自らの力を発揮しながら安心して学び、関係機関とつながり合って幸せに生きるための舞台づくりをする学校～		今年度の重点目標		1. 安心して学べるための環境づくりに努める。
					2. 支え合い、つながりあう体制づくりに努める。
					3. 豊かな生き方をめざしたキャリア教育を推進する。
					4. 自己の授業を見直し、授業改善を行う。

年 度 当 初					評 価 結 果 基 準
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	
1. 安心して学べるための環境づくり ☆保護者も評価 ●生徒も評価	(小学部) どの児童に対しても実態に応じた支援や指導ができるようにする。	担任以外の児童に対する支援方法について共通理解が不十分である。	・保護者が、安心して学部の教職員に支援や指導を任せている。 ☆ ・教職員が個のねらいにそった適切な支援や指導を行っている。	個の実態に応じた支援方法のわかる資料を作り、活用する。	S: 3種類の学習グループの児童に対し、資料を活用し支援することができた。 A: 1種類の学習グループの児童に対し、資料を活用し支援することができた。 B: 学級の児童の資料を活用し、支援することができた。 C: 担当している児童の資料を活用し、支援することができた。
	(中学部) 教室が生徒にとって安心して学び、安定して過ごせる居場所となるような環境作りをする。	大半の生徒は、教室で安心して学んでいるが、見通しの持てない生徒もいる。	生徒が見通しをもちながら安心して学び、教室を居心地のよい居場所と感じて過ごしている。 ● ☆	生徒が見通しのもてるような視覚支援教材などを作成する。	S: 必要と思う時には、毎時間視覚支援教材を使い、他の教職員にも活用を提案した。 A: 必要と思う時には、毎時間視覚支援教材を使用した。 B: 必要な時には視覚支援教材を作成して使うように努めたが、十分ではなかった。 C: 視覚支援教材などを作成して使うことはなかった。
	(高等部) 一人一人の特性や実態を共通理解しながら、生徒が安心して学べるような支援や環境づくりに努める。	生徒一人一人の特性や実態、必要な支援について、教員間の共通理解が不十分である。	・教職員は、生徒一人一人の障がいや病気の状態・特性等を理解し、安心して学べるように支援や環境づくりをしている。 ・生徒は、適切な配慮や支援・環境づくりに努めている。	生徒の認知・理解の特性や障がいに基づく有効な支援事例を教職員間で共有する。	S: 学部生徒全員の特性や、有効な支援事例を教職員間で共有し、実践に生かせた。 A: 単一障がい学級、重複障がい学級ごとに、生徒全員の特性や、有効な支援事例を教職員間で共有できた。 B: 学級の生徒全員の特性や支援について教職員間で共有できた。 C: 生徒の特性や支援を共通理解しようと努めたが、教職員個々の情報で終わり、共有ができなかった。
2. 支え合い、つながりあう体制づくり	(小学部) 療育園等の専門機関と連携し、支援をつなげ、よりよい支援ができるようにする。	児童の療育相談の指導助言を教育の実践に十分活用しきれていない。	P T、S T、O Tから受けた指導を実践に活かし、個に対する適切な支援ができています。	目的意識を持ってP T、O T、S Tの指導を受ける。	S: P T、O T、S Tの指導を活かし、実践した結果を指導者に報告した。 A: P T、O T、S Tの指導を、担当する児童全員の支援に活用した。 B: P T、O T、S Tの指導を、学級の児童の支援に活かすことができた。 C: 指導を受けたが、課題の把握が不十分だった。
	(中学部) 医療等の関係機関と連携し、教職員間で共通理解をして支援を行う。	様々な関係機関からの情報や指導が教職員間で十分に共通理解できていない面がある。	学部の教職員は、他機関からの情報も参考にしながら一人一人に応じた適切な支援を行っている。	共通理解を図るため、関係機関から得た指導を学部会や朝会で職員に伝える。	S: 情報を共有して、チームでの支援に活かすことができた。 A: 情報を共有して、学級での支援に活かすことができた。 B: 情報は共有できたが、支援は担当者に任せていた。 C: 情報も共有できず、支援は担当者に任せきりとなっていた。
	(高等部) 外部専門家と積極的に連携し、指導を授業や日常生活の支援に活かす。	様々な外部専門家とつながっているが、その指導を十分に活かしているとはいえない。	外部専門家と連携し、その指導を教育活動や生徒のQ O Lの向上に活かしている。	定期的に外部専門家から得た指導を学部全体に伝える機会を設ける。	S: 外部専門家から受けた指導について、学部全体で分析したり方策を考えたりする機会を2か月に1回程度設けた。 A: 外部専門家から受けた指導について、学部全体で分析したり方策を考えたりする機会を学期に1回設けた。 B: 外部専門家から受けた指導について、学部全体で分析したり方策を考えたりする機会を年1回設けた。
3. 豊かな生き方をめざしたキャリア教育の推進	(小学部) 教職員が児童の卒業後のビジョンをイメージしながら、小学部でつけた力について語る力を身につける。	保護者・教職員とも、将来の具体的なイメージが持てておらず、小学部段階から身につけておくべき力や備えておくべきことが具体的に見えていない。	保護者の不安の解消やニーズを満たす説明ができ、児童の次の学部での姿や卒業後の姿を語ることができる。 ☆	卒業生の情報、福祉サービスの状況、小学部の時につけたい力等、保護者に情報提供を行う。	S: 学級以外の保護者にも卒業後のビジョンをイメージしながら、様々なニーズに合った情報を提供することができた。 A: 学級の保護者へ、卒業後のビジョンをイメージしながらニーズに合った情報を提供することができた。 B: 学級の保護者へ、問われたことについての情報を提供することができた。 C: ニーズに合った情報を提供することができなかった。
	(中学部) 進路情報の収集や研修に努め、生徒の卒業後の生活を保護者と一緒に考える。	保護者、教職員ともに進路についての具体的な情報について不十分な面が見られる。	保護者、教職員ともに進路についての具体的な情報を知り、生徒のニーズに応じた進路を一緒に考える。 ☆	個に応じた具体的な進路情報を得るための研修を行う。	S: 進路指導に必要な研修を行い、保護者の進路に対する意識の深まりが見られた。 A: 中学部の生徒の将来を考える上で必要な研修を行い、進路について保護者と一緒に考えた。 B: 進路指導に必要な研修を行ったが、保護者と一緒に考えるには至らなかった。 C: 進路指導に必要な研修を行ったが、十分とはいえなかった。
	(高等部) 卒業後の生活に役立つ学習や体験活動を取り入れる。	学習や体験活動が生徒の卒業後の生活を見通したものとしては不十分である。	卒業後の生活を見通した学習や体験活動を計画実施している。	教育課程上の位置づけやねらいを明確にし、卒業後の生活を考えた学習や体験活動を設定する。	S: 卒業後の生活に向けての課題を明確にし、行った学習内容や体験学習が有効だった。 A: 卒業後の生活に向けての課題を明確にし、学習内容を選定し体験学習を実施した。 B: 卒業後の生活に向けての課題を明確にしたが、学習内容の選定や体験学習の設定が不十分だった。 C: 卒業後の生活に向けての課題の把握が不十分で、学習内容の選定や体験学習の設定も不十分
	卒業後に必要なコミュニケーション力や自己表現力の育成に取り組む。	挨拶をはじめとするコミュニケーションや、自己表現が苦手な生徒が多い。	生徒がすすんで挨拶したり自己表現したりする意欲や技能が身についている。 ●	挨拶やコミュニケーション、マナーの指導について、一人一人の課題を明確にして教職員全員で取り組む。	S: 学部全体で、一人一人の挨拶やコミュニケーション、マナーの指導についての課題を共通理解し、実践した。 A: 各コースごとに、一人一人の挨拶やコミュニケーション、マナーについての課題を共通理解し、実践した。 B: 学級で、一人一人の挨拶やコミュニケーション、マナーについての課題を共通理解し、実践し
4. 自己の授業を見直し、授業改善		(小学部) 授業の見直しにつながる教師間の話し合いが十分にできていない。	・教師は自分の授業を振り返り、授業を改善している。 ・子どもたちがいきいきとした表情で主体的に学習に取り組んでいる。 ●	話し合いや振り返りをして授業改善をする。	S: 進んで授業改善を行い、他の教員のモデルとなった。 A: 授業改善の話し合いを受けて、自分の授業改善にほぼ活かした。 B: 授業改善の話し合いを受けて、自分の授業改善に大体活かした。 C: 授業改善の話し合いを自分の授業改善に活かすしかなかった。
	(小学部) (中学部) (高等部) 互いに授業を見合ったり、授業を検証したりしながら、自分の授業を見直し、改善を図る。	(中学部) 教師間で事前・事後の話し合いや授業を見合う機会が少なく、授業の改善に至っていない。	・自分で授業を振り返ったりアドバイスを活かしたりして授業を改善している。 ・授業が改善されることで生徒が主体的に授業に取り組んでいる。 ●	事前・事後の話し合いや授業を見合う機会をつくる。	S: 授業をチームで評価し、改善に活かすことができた。 A: 授業が見合える機会を設定し、改善に向けた話し合いができた。 B: 授業を見合える機会を工夫をし、気付いたことを授業者に伝えた。 C: 授業を見合える工夫ができなかった。
		(高等部) 互いに授業を見合って話し合う機会がなく、支援のヒントをもらったり自分の実践を検証したりする場が乏しい。	・他者からの意見やアドバイスを活かして、自らの授業を改善している。 ・授業が変わることで、生徒がいきいきと課題に取り組んでいる。 ●	参観の視点を明確に提示して、年間一人2回程度授業を公開する。	S: 学部内で年間一人2回以上の授業公開をし、授業を検討・改善した。 A: 各コースごとに年間一人2回授業公開をし、授業を検討・改善した。 B: 年間一人1回程度授業公開をし、授業の検討・改善に努めた。 C: 授業公開を年1回した。

赤字は本校教職員として身につけたい標準レベル